



江戸府
400
東京

第三十三回

邦楽演奏会

邦楽名曲選

2003 都民芸術フェスティバル

平成十五年三月十五日(土)

国立劇場小劇場

第一部	十二時開演	三時半終演
第二部	午後四時開演	七時半終演

主催 邦楽連合会

社団法人 義太夫協会

中央区銀座4-13-11 文明堂3F
電話三五四-1154 七一番

清元協会

世田谷区桜1-13-12
電話三七〇六-1952 七番

財団法人 古曲会

中央区銀座八-16-13 新橋会館
電話三五七-1102 二六番

新内協会

新宿区神楽坂六-12-17
電話三二六〇-1180 四番

常磐津協会

港区南青山七-17-15
電話三四〇七-7453 五番

社団法人 長唄協会

中央区銀座二-11-19 四番
電話三五四-2165 六四番

社団法人 日本三曲協会

港区赤坂二-15-12 四〇三番
電話二五八五-1991 六番

(五十音順)

助成 東京都 芸団協・邦楽振興基金

2003都民芸術フェスティバル参加公演一覧

種目	演目等	開催日/会場	連絡先(主催団体)	
特別公演	江戸開府400年スペシャル 江戸の華・TOKYOの華	1/11 青山劇場	特別公演実行委員会 03-3237-2222	
オペラ	「カルメン」	2/21~24 東京文化会館大ホール	二期会オペラ振興会 03-3796-1831	
	「イタリヤのトルコ人」	3/7~9 東京文化会館大ホール	日本オペラ振興会 03-5466-3181	
	「金髪親父恋達引」「霊媒」	3/29・30 シアターアプル	東京室内歌劇場 03-5642-2267	
オーケストラ	日本フィルハーモニー交響楽団 指揮:藤岡幸夫	1/30	日本演奏連盟 03-3437-6837	
	東京フィルハーモニー交響楽団 指揮:バスカル・ヴェロ	2/7		
	東京都交響楽団 指揮:ルドルフ・バルシャイ	2/12		
	読売日本交響楽団 指揮:現田茂夫	3/2		
	東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団 指揮:飯守泰次郎	3/7		
	NHK交響楽団 指揮:外山雄三	3/12		
室内楽	「デュオ・リサイタル」	1/17	日本演奏連盟 03-3437-6837	
	「ピアノ・トリオの夕べ」	2/20		
ポピュラー	「シャンソン&タンゴハイライト」	3/5	よみうりホール	
	「永遠のラテン名曲集」	3/6		
邦楽	第33回邦楽演奏会 長唄・常磐津・清元・義太夫・三曲・新内・古曲	3/15 国立劇場小劇場	義太夫協会(邦楽連合会) 03-3541-5471	
	現代演劇	迷宮オペラ「青ひげ公の城」	2/1・2・5~9 東京芸術劇場中ホール	日本劇団協議会 03-3341-8151
児童・青少年演劇	ふれあいの5つの玉手箱	「海はいのち ころもひとつに Aプログラム」(民族芸能)	2/22・3/8 練馬文化センター大ホール他	日本児童・青少年演劇 劇団協同組合 03-5353-6821
		「リーダーズシアターお話しがいつぱいスペシャル」(朗読劇)	3/9・22・26・29・30 大田区・区民プラザ小ホール他	
		「シェイクスピアを盗め」(舞台劇)	3/18~23 俳優座劇場他	
		「ひっくりかえったマント」(ミュージカル)	3/21~23・26~30 府中の森芸術劇場他	
		「小さくなったパパ」(人形劇)	3/19~21・23 八王子クリエイトホール他	
バレエ	「くるみ割り人形」全2幕	2/6・8・9 東京文化会館大ホール	日本バレエ協会 03-3499-5525	
	ベジャール・ガラ「ギリシャの踊り」「ドン・ジョヴァンニ」「ボレロ」	1/16・18・19 東京文化会館大ホール	東京バレエ団 03-3791-8888	
	「ロメオとジュリエット」全幕	2/8・9 ゆうぽーと簡易保険ホール	牧阿佐美バレエ団 03-3360-8251	
現代舞踊	「移行する破線」 「Illusion...鳥籠姫...」 「遠い道」 「イノセント・チーフ」	1/14・15 東京国際フォーラムCホール	現代舞踊協会 03-3400-4544	
日本舞踊	第46回日本舞踊協会公演	2/11~13 国立劇場大劇場	日本舞踊協会 03-3533-6455	
能楽	第43回 式能	2/16 国立能楽堂	能楽協会 03-5925-3871	
民俗芸能	第33回東京都民俗芸能大会 「江戸東京400年の歌と踊り」	3/8・9 東京芸術劇場中ホール	東京都民俗芸能大会実行委員会 03-3234-6800	
寄席芸能	第33回都民寄席	鈴々舎馬風ほか	2/14 東村山中央公民館ホール	都民寄席実行委員会 03-3833-8622
		春風亭柳昇ほか	3/1 八王子市民会館	
		三遊亭円歌ほか	3/7 東京芸術劇場中ホール	
		柳家小三治ほか	3/9 瑞穂スカイホール	
		桂文治ほか	3/11 利島中学校体育館	
		桂米丸ほか	3/12 大島町開発総合センター	
		(浪曲の会)東家浦太郎ほか	3/15 町田市民ホール	
		3/26 東京芸術劇場中ホール		

二〇〇三年都民芸術フェスティバルの開催に寄せて



東京都知事 石原 慎太郎

都民芸術フェスティバルは、都民の皆さんに良質な芸術文化に触れる機会を広く提供するとともに、東京における芸術文化活動の振興を目的として、東京都が芸術文化団体の公演に助成して開催するものです。

今年で三十五回目を迎える本フェスティバルは、開催を心待ちにするファンの方も多く、今や東京の新春を彩る行事として定着しています。関係団体の皆様のご尽力に心から感謝申し上げます。

今年、徳川家康が江戸に幕府を開いてから四百年目の節目の年にあたります。江戸から平成に至る四百年間には、この東京を舞台に様々な芸術文化が花開きました。それらは、私たちの創造性をはぐくみ、心豊かな社会を形成し、都市の魅力を高める重要な要素となっています。長い歴史に根ざす文化と伝統を背景に、世界に向けて文化を発信し、多様な文化の交流拠点として、東京を世界中の人々を惹きつける都市にしていきたいと思っております。

皆さんには、新春の一月十一日から三月三十日まで、都内各地で繰り広げられる伝統芸能から音楽、演劇、舞踊まで、多彩な芸術文化を心ゆくまでお楽しみいただきたいと思います。また、ほとんどの公演に学生割引や学生席を設けていますので、若い人たちにも大いに芸術文化を堪能してもらいたいと思っております。終わりに、本フェスティバルに参加された邦楽連合会の公演のご成功と今後ますますのご活躍を祈念して、あいさついたします。

第一部 一番組 (十二時開演)

一、 箏曲 さ ら し

箏 箏

箏

萩岡 松韻
 加藤 悠紀
 竹内 風世
 上野 京峰
 梅沢 枝園
 渡辺 宏華
 鹿野 岡華
 永村 岡華
 老鶴 萩英
 吉田 萩英
 沼田 萩英
 大村 萩英
 栗池 萩英
 栗池 萩英
 竹山 萩英
 渡辺 萩英

三弦

市川 益中 矢武 渡栗 安齊 丸山
 川田 尾代 藤山 藤山 藤山
 萩倭 萩里 萩泉 萩文 萩文 萩文
 萩文 萩文 萩文 萩文 萩文 萩文
 萩文 萩文 萩文 萩文 萩文 萩文

二、 一中節 小春髪結之段

浄瑠璃 都

一せつ 一まり

三味線 都

一のぶ 一志朗

三、 義太夫 艶容女舞衣

はですがたおんなまいぎぬ

酒屋の段

浄瑠璃 竹本朝重

三味線 鶴澤友路

四、新内 名物 姥ヶ餅 (姥ヶ餅)

浄瑠璃 富士松 魯遊
三味線 新内 仲三郎
上調子 岡本 宮之助

休 憩 (十分)

五、清元 歌へすぐ名残大津絵 一座頭

浄瑠璃 清元 初栄太夫 三味線 清元 志寿朗
同 清元 清栄太夫 同 清元 志寿造
同 清元 清美太夫 上調子 清元 志一朗

六、長唄 巽八景

唄 和歌山 富野 三味線 杵屋 喜代
同 和歌山 富峰 同 杵屋 喜栄
同 和歌山 富康 同 杵屋 喜寿海

七、常磐津 神楽 諷雲井曲毬 | どんつく |

浄瑠璃 常磐津 初勢太夫 三味線 常磐津 文字蔵
同 常磐津 光勢太夫 同 常磐津 齋蔵
同 常磐津 秀三太夫 上調子 岸澤 式松

五、義太夫 増補大江山

— 戻り橋の段 —

浄瑠璃 竹本 駒之助 三味線 鶴澤 津賀寿
 同 竹本 越孝 同 鶴澤 駒治

八雲 鶴澤 三寿々

六、清元 幻 椀 久

浄瑠璃 清元 勇輝 三味線 清元 秀喜之
 同 清元 栄一 同 清元 崇勇美
 同 清元 洲寿代 上調子 清元 知寿
 同 清元 千恵香

七、長唄 京鹿子娘道成寺

唄 杵屋 勝太郎 三味線 杵屋 勝雄
 同 坂田 仙蔵 同 杵屋 裕光
 同 杵屋 勝利郎 同 杵屋 勝招也
 同 杵屋 勝彦 同 杵屋 勝正雄
 同 杵屋 勝吉治 同 杵屋 勝十朗

囃子 笛 福原 徹彦
 小鼓 仙波 元章
 立鼓 仙波 宏祐
 大鼓 仙波 大明
 太鼓 仙波 和典

(終演予定 午後七時半)

○一部の出演者に変更のある場合はお許し願います。

第一部

一、箏曲・さらし

このもとは、元禄（一六八八〜一七〇三）以前に北沢勾当が三弦曲として作曲したもので、それを享保（一七一六〜三五）以後に深草檢校が手事物として発展させたもので、最後の合の手を手事としたのが特色。この手事と第三歌の後の合の手がとくに有名で、のちに「晒しの合方」としていろいろな三味線音楽で利用されているし、また形を変えた作品も多い（例、長唄「越後獅子」など）。

宇治川の布ざらしを音楽的に表現した曲で、布を川水にさらして漂白することが、かなりリズムカルな仕事であったし、またそれに水の流れるさまを擬音的に交えて、器楽的な面白さをもねらったもの。

初めの「横の島」というのは、古来この島の住人が布ざらしを業としていたところで、宇治市の宇治川の西側にあった。それはたとえば『新後拾遺集』にも「布晒す宇治のわたりの垣根より、珍しげなく咲ける卯の花」とある。



二、一中節・小春髪結之段

別称「黒髪」。従来は近松門左衛門作の享保五年（一七二〇）初演の「心中天の網島」から、初代都一中のために、あるいは国太夫半中（のちの宮古路豊後掾）のために書いて与えた作品と言われてきた。

内容からいうとたしかに「心中天の網島」のワキ筋で、もともなかった「天の網島」にはない場面である。いよいよ治兵衛と心中しようとした小春が、死出の支度に髪結いのお綱に髪を結ってもらうところ。酸いも甘いも知りつくしたお綱が、それと知って髪を結いながら意見を述べる。ほとんどすべてがお綱の言葉で、終りになって小春がお綱の意見に感謝し、心中は思い止まると言うまで。しかし実際は二人は心中してしまう。もちろんこのお綱は創作で、「天の網島」には出てこない。いかにもありそうな場面で、設定に無理はないし、なにしろ名文なので、近松が書いたと信じられたのも当然であった。

しかし最近の研究では、宮園節の祖である鸞鳳軒が、まだ豊前とっていたところに最初の形を作り、それが豊美繁太夫に伝わり（これは地歌に残った）、さらに三代目宮古路一仲から五代目都一中という経路で、現在の一中節に伝承されたものであるという。

三、義大夫・艶容女舞衣―酒屋の段―

竹本三郎兵衛、豊竹応律、八民平七の合作。安永一年（一七七二）大坂豊竹座で初演。

元禄八年（一六九五）十二月七日、大坂千日寺の焼き場裏（通称サイタラ畑）で、女舞大夫三勝と大和五条新町の茜屋半七が心中するという事件があった。これはたいへんな話題になり、歌祭文や踊音頭、浮世草子、さらに歌舞伎や浄瑠璃になって広まった。浄瑠璃として成立した「笠屋三勝廿五年忌」「女舞剣紅楓」などをさらに脚色したもの。三巻六段構成だが、とくに下の巻最後の上塩町が有名で、お園が半七の身に思いをさせての述懐「今ごろは半七さん」以下がよく知られている。

三勝と半七はお通という子まである深い仲であった。いろいろあつて、半七は贖小判を渡された善右衛門を殺してしまふ。上塩町の茜屋に三勝は酒を買いに来て、お通をそれとなく渡して去る。半七の父半兵衛は、勘当した息子の半七のために、代官所で縄を受けて帰ってくる。お園の父宗岸は、これを知って、娘を連れ戻した非を悟り、お園をつれてわびに来る（今日の演奏はここから）。二人が奥へ入ったあと、お園の述懐となる。

なおこのあとは、お園によって先程の娘がお通であることがわかり、遺書も見つかり、家内の嘆きを戸外で聞いた三勝と半七は心中に行くが、善右衛門の悪事が露見し、二人の命も助かる。

四、新内・名物姥ヶ餅

富士松魯中作詞・作曲。新内節のチャリ物（滑稽物）の一つ。嘉永三年（一八五〇）ごろの作曲か。魯中は同じチャリ物として「膝栗毛」三段を作曲しているし、五年後には常磐津の「三世相錦繡文章」が作られているから、当時はこうしたものが喜ばれていたようである。

東海道は草津の宿で、姥ヶ餅を売っているのは、もと三途川の姥で、家出をしてこの世に逃げてきた閻魔大王を探しているという設定。そこへ今は「ひぬかの八蔵」という馬方になっている閻魔大王が馬を牽いて通りかかり、苦勞話になる。やがて餅をごちそうになり、この家の主人の留守のうちに冥土へ帰ろうとすると、地藏尊があらわれ、金ができるまで二人はしばらく働くことになる。姥は閻魔大王の育ての親という関係で、「重の井子別れ」や「先代萩」の飯炊きのパロディがあり、馬子歌をきかせるなどして、終りに姥ヶ餅の由来を述べるというものの時間の都合で、今日は一部を省略した演奏になる。

なお同名の鶴賀若狭掾作品が出版されているが、徳本上人のことが出てきているので時代が合わない。やはりこれは魯中の作品としたほうがいいようである。

五、清元・座頭

別称「大津絵座頭」あるいは語り出しから「ひよつくりの座頭」といい、また初演した俳優の名から「関三座頭」とも。本名題「歌へすく名残大津絵」（「名残」を「余波」とも）。勝井源八作詞、初世清元斎兵衛作曲。文政九年（一八二六）九月、二世関三十郎が上方へ帰るのに際して、お名残に踊った五変化舞踊の一。

座頭というのは、検校、勾当に次ぐ盲人の位だが、一般には盲人で琵琶・三味線・箏などを弾く芸人や、按摩・鍼などの医療を業とする者をさす。この「座頭」は、按摩や鍼もするが、上手に唄も唄うので、両方を兼ねているらしい。

内容は、犬に追われてひよつくり／＼と出てきた座頭が、犬にからまれ、はじめは杖で追い払おうとしたが、気を変えてたわむれるというもの。多くの「座頭物」と同じく犬がからむが、扱い方はユーモラスで、前弾からリズムカルである。「花に置く露…」からは伊勢音頭で、「これわんじゃいな…」はクドキ。「姑嫁ふる…」からはおどけ節の踊り地で、前のクドキと対照的な急テンポで楽しい部分。

特別な意味はないが、短い中に変化があり、江戸時代の風俗スケッチといったところ。なお初演の時は長唄と掛合いだっただが、現在は清元で演奏されることが多い。

六、長唄・巽八景

二世立川焉馬作詞、十世杵屋六左衛門作曲。天保九年（一八三八）四月二十八日、池田信濃守の邸宅で初演。

巽とは辰巳（東南）で、江戸の東南にあたる深川のこと。この曲は深川の風物を、中国の瀟湘八景に見立てた歌詞で、永代の帰帆、八幡の晚鐘、佃の落雁、仲町の夜雨、石橋の暮雪、新地の晴嵐、洲崎の秋月、櫓下の夕照がそれに当たる。当時八景物が流行していたようで、絵画にも浮世絵に◇◇八景というのが盛んに刊行されている。

全曲三下りで、粹な中にも渋味があり、小品ながら八景物の傑作と言われている。なお終りに作詞者の立川焉馬の名前を読み込んであるのが、いかにも気がきいている。

七、常磐津・神楽諷雲井曲毯（どんつく）

三世桜田治助作詞、五世岸澤式佐作曲。弘化三年（一八四六）一月、市村座の「当曾我武絵懸額」の一番目四立目に初演。

この曲は上下の内の下。上は源三位頼政と猪の早太の鶴退治があり、引き抜いて太神楽となった。「どんつく」というのは太神楽の太夫の相手のボケのこと。この作品ではその囃子言葉の面白さを主題にしているが、当時の風俗を知る上でも貴重である。

太神楽は獅子神楽の一種で、新年には一年の無事息災を祈る門付に訪れた。この曲の前には文化十二年（一八一七）にその名も「太神楽」という常磐津が上演されている。

第二部

一、三曲・四季の柳

磯部艶子作詞、宮城道雄作曲。昭和二十九年（一九五四）五月二十八日、日比谷公会堂で開催された「宮城道雄音楽生活五十年記念演奏会」で初演。作詞者は「遠砧」以来の磯部艶子だが、この時にはすでに故人となっていた。歌詞の内容は、季節によって映ろう柳のさまを、女性の髪にたとえて綴ったもの。

春の柳は乙女の振り分け髪にたとえる。いかにも春らしい。夏の柳は洗い髪にたとえられる。優しくつややかな風情。秋の柳は乱れ髪、もつれ髪にたとえられて、人生のきびしさを唄う。冬の柳は雪をかぶった老女の白髪にたとえられる。しかしそれは人生の苦悩を超越した境地で、やがて新しい年を迎えて祝うというもの。いかにも女性らしい着眼と四季に配したこまやかな感情がすばらしい。

三弦は二上り、箏は平調子で始まる。前弾はかなり長い。「おぼろ月」のあとの長い合の手は冒頭から三弦は本調子、箏は四上り半雲井調子に変わる。ここから夏の気分。

手事は夏の続き。「さらし」や「八重衣」の旋律や音型を巧みに取り入れ、賑やかな演奏となる。手事の終わりでもとの調弦に戻る。二つの長い合の手があり、とくに「もつれ髪」のあとの合の手には「古道成寺」の「川渡りの合の手」が利用されている。冬の部分は三弦は高三下り、箏は中空調子になる。冬は祝儀物の気分で古曲の獅子物の雰囲気を感じられる。

三種の楽器の合奏の関係は、三種が部分により交代して、どれかが本手を弾くと他の二種は替手にまわるといような関係で作られている。また尺八が全曲通して吹かれないのもこの曲の特色。

二、新内・酔月情話 ― お梅さんげ ―

もとは「梅雨衣酔月情話」（花井お梅）で、明治二十一年（一八八八）三月に五世富士松加賀太夫作曲。それを新内勝鳳が短く編曲したものだ。

明治二十年六月九日夜、日本橋浜町酔月楼の女主人花井お梅が、番頭の峰吉を刺し殺した事件は、たいへんな評判となり、そのあらまは『東京絵入新聞』に「花井於梅酔月奇聞」として連載された。その記事を脚色して新内化したもの。

お梅は幼い時に養女に出され、芸者になり、苦勞して日本橋浜町に酔月楼という待合を開業したが、名義人はめぐり合った実父となり、やがて父娘の対立になった。そこへ失業していた峰吉を番頭に取り立てたのだが、初めは忠実に見えた峰吉が、父の味方をして、お梅を裏切ったと誤解しての犯行だったという。

曲はその殺しの場面だが、「うきふし繁き三筋の流れ」以下のお梅のクドキが知られていて、明治以降の新内の新作としては大流行している。なお加賀太夫はこの後日にあたる「お梅自首の段」を作曲したが、陰気なせいかな語る人はいないようである。

三、河東節・浮世傀儡師

通称「傀儡師」。傀儡師というのは、平安時代から始まったという人形回しのごとで、でく回し、箱回し、山猫回しなどと言われ、首から箱を下げ、その箱の中から小さな人形を出して操り、簡単な物語などを語って歩いた街頭芸人のこと。とくに江戸時代を通じて行われたが、その一部はやがて浄瑠璃という音楽と結びついて発達し、後の人形浄瑠璃義太夫節につながった。その江戸時代初期の形を描いたもので、子供達には人気があった様子が見られる。

河東節成立以前にあつた外記節からの預かり浄瑠璃といわれる。内容はその傀儡師が招かれて、箱の中から人形を取りだし、物語を始める。物語は花嫁を迎え、やがて三人の子宝に恵まれ、末の子（血の余り）を肩に乗せて都めぐりを楽しむというもの。終りは能の「呉服」の終りの部分を引用してまとめている。のち、同名の長唄、清元曲もできた。

四、常磐津・戎詣恋釣針

通称「釣女」。河竹黙阿弥作詞、六世岸沢古式部（七・八世岸沢式佐）作曲。狂言の「釣針」を脚色したもので、初世花柳寿輔の発案で、明治十六年（一八八三）十二月にそのおさらい会で初演。その後平山晋吉が加筆して明治三十四年（一九〇一）七月の東京座で、常磐津・岸沢和解の披露祝賀曲として上演された。

内容は、西の宮の恵比寿神社に、ともに妻を持たぬ大名と太郎冠者が詣でて、大名は美女を、太郎冠者は醜女を釣るという話。狂言でも、もとは醜女をつり上げるのは大名だったが、江戸時代に太郎冠者になつたという。

神仏に祈つて妻をめとるなどとは、現在ではとても信じられないことだが、ある時代には「申し妻」という習俗があつた。これは夫婦の縁はまことに不思議なもので、神仏の導きによるものとしか考えられないということのあらわれであろう。中世にはいくつかの説話があつた。なおこの話は、外国でもよく理解され喜ばれるという。

なお「恵比寿三郎」というのは、伊弉諾、伊弉册二神の第三子であることからの通称。

五、義太夫・増補大江山

豊澤仙左衛門（三世豊澤团平）作曲。

もともと義太夫節には近松門左衛門の「大江山酒吞童子」という作品があつたが、文化十一年（一八一四）に「酒吞童子話」として再演された。それを明治三十三年（一九〇〇）一月、大阪堀江明楽座で「大江山酒吞童子」として上演するに際して、明治二十三年（一八九〇）に東京歌舞伎座で初演された常磐津の「戻橋」（河竹黙阿弥作詞、六世岸澤式佐作曲）を義太夫節に移し、「二条戻橋の段」として増補挿入したもの。現在では今日のように「増補大江山」としてここだけを上演するのが一般的。

都の警固に当たる源頼光の家臣渡辺綱は、ある夜、主人の使いで一条戻橋に来かかる。すると美女がたたずんでいて、五条までの道連れを頼まれる。しかし月に照らされて水に映る女の姿に不審の念を抱く。綱が父の名を尋ねると、五条の扇折と答え、望まれるままに舞を舞う。さらに綱を恋しい男と言う女に、綱は最前水に映った姿から悪鬼であろうと迫る。女はたちまち鬼女の姿に変じ、綱に襲いかかる。綱は源氏の名刀髭切丸を抜いて、鬼と立ち回りになり、腕を切り落とすという筋。舞を舞う二上りの「桜狩りする諸人が」以下のところに八雲琴が入るのが特色。

六、清元・幻椀久

岡村紫紅作詞、五世清元延寿太夫作曲。大正十四年（一九二五）新橋演舞場の落成祝賀会・東会の時に初演。歌舞伎では昭和三年（一九二八）六月の歌舞伎座で六代目尾上菊五郎が踊ったのが最初。

大阪御堂筋の豪商椀屋久兵衛（久右衛門とも）が、新町の遊女松山と馴染み、遊蕩に身を持ち崩して座敷牢に入れられて発狂、鉢叩きとなつてさまよい歩いたと伝える。この題材を脚色したものに、現行曲には一中節「椀久道行」、長唄「一人椀久」「二人椀久」などがある。

内容は、松山恋しさに狂つた椀久が、鉢叩き（「はっちはち」といつている）となつて登場、松山の姿を幻に見る。やがて替間の菊市まで幻に見て、過ぎし昔の華やかで賑やかな酒宴を思い出し、遊び疲れて倒れるまで。清元の狂乱物として「保名」と双璧をなす作品であり、ともに男性が主人公であるのが特色。

七、長唄・京鹿子娘道成寺

宝暦三年（一七五三）春、中村座の「男達初買曾我」の第三番目に、初世中村富士郎江戸下りお目見得狂言として初演。前年、京都嵐三右衛門座でその原形はできていたと推定され、江戸では二上りの部分を加えたといわれる。

道成寺伝説を踏まえ、能の「道成寺」を基本に「三井寺」の一部を借用し、劇的などころは最後の鐘入りだけで、全体を組唄風にまとめたもの。それぞれの唄に、それぞれの娘が体験したであろう、さまざまな恋の姿をあらわして、それが千々に乱れる娘心をあらわすという、複雑な構成をとっているであろう。しかしそれらの理屈を離れて、長唄曲のというより三味線音楽の、邦楽の最高傑作と言える作品である。

なお、特色ある「チンチリレンの合方」は、明治になつて三世杵屋正治郎が作曲して加えたものという。

御礼 邦楽連合会

本日はようこそおでかけ下さいまして、ありがとうございました。何かと不行き届きの点もございましたが、お許しを願ひまして、どうかごゆつくりとお楽しみ下さいませよう、お願い申し上げます。

今までには、このようにしてまとめて御鑑賞していただく機会は、少なかったように思います。その少ない機会を大切にしようと、出演者も一生懸命でございます。これからも、どうか続けて邦楽に変わらぬ御支援をいただけますように、お願い申し上げます。

来年も同じくここ国立劇場小劇場で、三月三日（水）に開催する予定でございます。番組がきまり次第、御案内をお送りいたしますので、はさみこみのアンケート用紙に、おところ、おなまえをお書き込みの上、受付にお渡し下さいますよう、お願い申し上げます。また、今日おきき下さいました御感想や御意見などもお寄せ下さいまして、よりよい邦楽のために御指導を賜りますよう、合わせてお願い申し上げます。ありがとうございました。